

# 「被懲戒の歴史」と「子どもと親の相互意見表明」を踏まえた子育て支援プログラムの構築に関する研究

藤 岡 孝 志

## Research on the construction of Child-Rearing Support Program based on “History of Disciplinary Action” and “Mutual Expression of Opinions between children and parents”

Takashi Fujioka

**Abstract:** In June 2019, corporal punishment and other prohibitions were included in revisions to the Child Abuse Prevention Act and revisions to the Child Welfare Act. The laws came into force in April 2020. One of the parenting techniques, the attachment clinical approach, is based on the knowledge of countries that have legislated bans on corporal punishment. There are many issues to consider in applying that approach to Japan. The author had to face the difference. After clarifying the parent's exercise of disciplinary authority and the way of thinking about the exercise, the clinical attachment approach suitable for Japan must be established. The current situation in Japan is that a significant number of supporters and caregivers have a history of being disciplined. Incorporating a clause prohibiting corporal punishment into the Child Welfare Law and the Child Abuse Prevention Law is not enough to improve this point. Measures against excessive disciplinary action are needed. Based on this, the results of the research were summarized. Then, we examined the usefulness of making use of the results for supervision in child guidance centers and children's homes. Finally, as a further development of this research, the author suggested the necessity of “improving the environment for children to express their opinions”.

**Key Words:** Prohibition of corporal punishment, Right to Discipline, Clinical Attachment Approach, Expression of Opinion, Supervision

**要旨：**2019年6月に、体罰その他の禁止条項が児童虐待の防止等に関する法律及び児童福祉法の改正に盛り込まれ、2020年4月に施行された。子育て技法のひとつである愛着臨床アプローチは、体罰を禁止することを法律で定めた国々の知見を踏まえたものである。日本での適用には多くの検討すべき課題があり、筆者らはその違いに直面せざるを得なかった。親による懲戒権の行使とその行使に対する考え方を明確にした上で、日本にあった愛着臨床アプローチを確立しなければならない。それぞれが被懲戒の歴史を抱えているというのが日本の現状であり、その点の改善は、体罰禁止の条項が児童福祉法等に盛り込まれただけでは不十分であり、その対策が必要である。そのことを踏まえ、その成果を児童相談所や児童養護施設におけるスーパーヴィジョンに活かすことの有用性を検討した。最後に、この研究のさらなる展開として、子どもの意見表明の環境整備の必要性を示唆した。

**キーワード：**体罰禁止 懲戒権 アタッチメント臨床アプローチ 意見表明 スーパーヴィジョン

## I 「被懲戒の歴史」と「子どもと親の相互意見表明」を踏まえた子育て支援プログラムの構築

日本の民法では、親の養育における懲戒権を存続させているが、この研究プロジェクトを開始した研究開始当初の2017年度には、日本はまだ法律において明確には体罰を禁止していなかった。しかし、2019年6月に、体罰その他の禁止条項が改正「児童虐待の防止等に関する法律」(以下、「児童虐待防止法」と改正児童福祉法に盛り込まれ、2020年4月に施行された。世界では、59番目に体罰を禁止した国となった(セーブザチルドレン2022他)。民法改正の動きがあるなか、未だ十分な法体系に位置づいていないという意味で、60か国を超える親の体罰禁止法を有する国々と日本は一線を画している。子育て技法のひとつである、海外で行われているアタッチメント臨床に焦点をあてたアプローチをはじめとする様々なアプローチは、体罰を禁止することを法律で定めた国々の知見(特に、アタッチメントに関する基礎研究)を踏まえたものであり、日本での適用には多くの検討すべき課題があり、筆者らはその違いに直面せざるを得なかった。

親による懲戒権の行使とその行使に対する考え方を明確にしたうえで、日本に合ったアタッチメント臨床アプローチを確立しなければならない。さらには、親以外の里親や子ども家庭支援の専門家(施設職員等)自身がこのような日本の状況で育ってきているという現実である。それぞれが被懲戒(親による懲戒権の行使;懲戒行動)の歴史を抱えているというのが日本の現状であり、その点の改善は、体罰禁止の条項が児童福祉法や児童虐待防止法に盛り込まれただけでは不十分であり、その対策が必要である。1979年に体罰禁止法を施行したスウェーデンは、その後、長い年月をかけて、「体罰禁止の内在化」を行っており、スウェーデンをはじめ、体罰禁止に先駆的に取り組んできた北欧諸国に学ぶべき点は多い(藤岡 2000,2021,2022)。そのことを踏まえ、ここでは、まず、筆者らが行ってきた研究の概観を行ない、それらを踏まえて、以下に、子どもの意見表明の環境整備が重要であるかということを考察していく。『懲戒行動の観点を踏まえたアタッチメント臨床の再構築』という研究の次には、子どもの意見表明の環境整備と児童相談所や児童養護施設におけるスーパーヴィジョンの展開があると筆者は考えている。本論文の後半では、そのあり方についても検討を行なった。

## II 『懲戒行動の観点を踏まえたアタッチメント臨床の再構築』研究の概要

### 1 本研究の目的

本研究の目的は、親による懲戒権が存続する日本において、いかに、子ども虐待に至らなくて済む養育方法を親が習得できるかを検討することであった。親の懲戒権の行使に対する考え方や懲戒行動の実態を検討した。これらを踏まえて、親による懲戒権(懲戒行動)を念頭においたアタッチメント臨床アプローチを再構成する。具体的には、1、親及び施設職員、里親による懲戒権の行使に関する実態調査、国際調査、2 アタッチメント臨床アプローチの適用によるプログラムの精緻化 1)「通告」という名の親支援開始一過程分析、2)在宅訪問及び通所による親支援

プログラムの精査、3) 児童養護施設等への職員支援プログラムの構築である。

#### (1) 懲戒行動、体罰の歴史的解析

明治時代、そして、その時代の基盤として底流をなす江戸時代の親による懲戒権及び懲戒行動に注目し、その特徴を明らかにしていく。

#### (2) 懲戒行動、体罰の国際比較的研究

スウェーデン、ここ数年のうちに体罰を禁止したドイツ、フランスに注目する。さらに、同じアジア圏の国々（スリランカ、インドネシア）にも視野を広げ、懲戒権、懲戒行動をどう、体罰禁止につなげていけるかの道筋を検討していく。

#### (3) 日本の懲戒権・懲戒行動の歴史を踏まえた、アタッチメント臨床アプローチの構築—児童養護施設、児童相談所等に注目して—

親や支援者自身の養育の歴史に目を向け、親による懲戒の歴史、子育て場面における親の影響について面接調査を実施し、アタッチメント臨床アプローチを再構築した。

## 2 研究の方法

#### (1) 懲戒行動、体罰の歴史的解析

懲戒行動や体罰の歴史について、明治民法の形成過程、及び江戸時代の体罰、子育てを掘り下げた。

#### (2) 懲戒行動、体罰の国際比較的研究

スウェーデンにおける子ども家庭福祉、子どもの権利擁護、子どもの意見表明についての政府関係者、支援組織の職員等に面接調査を行った。スリランカ、インドネシアにも視野を広げ、懲戒権、懲戒行動をどう、体罰禁止につなげていけるかの道筋を検討した。。

#### (3) 日本の懲戒権・懲戒行動の歴史を踏まえた、アタッチメント臨床アプローチの構築—児童養護施設、児童相談所等に注目して—

##### ①児童養護施設、児童相談所への面接調査

懲戒行動、あるいは、被懲戒の歴史が、親、里親、そして、施設職員にどう影響を与えたかについて、職員からの面接調査を実施した。

##### ②アタッチメント臨床アプローチの適用によるプログラムの精緻化

スタンダード版を作成し、領域にあった支援プログラムを構築する。その際、歴史的背景、国際的な観点、施設職員、児童相談所職員の面接調査から得られた知見も反映させた。

## 3 研究成果の概要

#### (1) 親の懲戒行動の理論的背景を精査

明治以来存在する民法上の懲戒権に起因している子育ての現状について精査し、日本における独自の子育て支援プログラムの構築のための理論的研究を中心に検討を行った。懲戒権の研究者から直接その歴史的経緯を聴取した。その結果、日本人の子育ての歴史が江戸時代以前にさかのぼることが示唆され、海外からの子育て支援法がそのプログラムだけが日本に導入されることへの危惧を共有することができた。さらに、フランス、ドイツ、スウェーデン、及び日本の児

童相談所での面接調査を実施した。その結果、親子の言語・非言語のやり取りを前提とする相互性が定着している国においてこそ、「体罰に寄らない子育て方法」が施行されており、『懲戒』という言葉が必要としない子どもの自立を前提とした「自分で考えることができる」子どもを育てるという強い理念が、体罰が禁止された国での子育て法として内在化していることを確認できた。

## (2) 懲戒権・懲戒行動の影響、及び、海外における体罰の位置づけについて

スウェーデンでは、長い社会民主主義の構築の歴史の中で、言葉を通してお互いの意見を尊重し、「個の自立」を互いに踏まえて相互交流するということが子育ての中に大きく反映されており、集団主義的な側面を有する日本の歴史と大きく異なっている。日本の親（職員）の中に、子どもの人権に対する意識がどれほど育っているのか、親自身がどのくらい尊重されてきたのか、という歴史にも考慮しなければ、子育ての際の人権意識の醸成にはつながらないということが明らかとなった（藤岡 2000,2021）。アタッチメント臨床アプローチに、このような日本の歴史を踏まえた、「子どもの尊重（「子どもの人権」意識）」「言葉による説明を多用した子育て方法」「子どもの気持ちを察する余裕を親が持つこと」「個の尊重」「個を阻害 / 疎外しない集団主義」などを踏まえて、文化基底的な子育てアプローチの醸成を、アタッチメント臨床アプローチに取り入れることの必要性を精査することができた。また、この点は、スリランカ、インドネシアでの懲戒への意識と文化的背景への考慮が必要な点と共通していた。子育て技法だけでなく、子育て環境の文化的歴史的背景への考慮が重要であることが示唆された。

## (3) 通告という名の親支援開始—児童相談所職員の認識する懲戒する保護者への支援の過程

「親による懲戒権が存続する日本において、いかに、子ども虐待に至らなくて済む養育方法が親が習得できるかが大きな課題である」という問題意識のもと、「アタッチメント臨床アプローチの適用によるプログラムの精緻化」のうち「1」「通告」という名の親支援開始—過程分析」について、児童相談所職員へのインタビュー調査によって明らかにすることを目的とした（宇野 2020, 宇野 2022）。また、宇野（2022）で示された理論記述の実践現場における有用性と適用可能性について検討し、あわせて実践現場での使用の際にその具体例が想起されるものか、妥当なものであるかについて検討した。「保護者の懲戒行動」という観点から保護者のしつけ、保護者への支援を分析し、児童相談所の職員が認識する保護者の懲戒の意味と保護者の不適切な懲戒に対する支援の意味について明らかにした。通告による親支援の過程の特定化の際に、「保護者の懲戒行動」すなわちしつけや教育の方法として行われる制裁、懲らしめるという観点から見直すことによって、「懲戒ではなく虐待である」という新たな認識をもたらす可能性を示唆する結果が得られた。

## (4) ドイツにおける親の懲戒行動への認識と取り組み

2020年に体罰禁止が法定化された日本の状況について、法規制や社会的規範の観点から懲戒行動を考察するため、2000年の民法典の改正により体罰禁止が法定化されたドイツを研究対象とし、ドイツにおいて体罰がどのように認識されているのか明らかにすることを目的とした。和田上（2020）によれば、分析の結果、ドイツにおける体罰は次のように説明される。体罰の特徴として以下の3点が挙げられる。(1) 社会文化規範に反する行為として認識され法規制をし

ながらも、一般には養育の方法として用いられているという矛盾をはらんでいる点、(2) 体罰が親の権利として容認されてきた時代があったことが、体罰に対する認識を完全に否定すべきものでないとの意見を形成する背景に存在する点、(3) 体罰による被害体験や子育ての負担、経済状況などから体罰を使用せざるを得ない状況にある人がいる点である。これらはドイツにおいて体罰禁止を進めていく上で大きな課題となることが明らかとなった。児童虐待等の問題を担当する複数の専門職を対象とした調査では、体罰禁止が法定化される 2000 年以前から、養育における非暴力は大きな議論となっており、体罰を容認する社会的な土壌が存在していたとのことであった。日本の今後を見通すうえでの示唆が得られた（和田上 2022）。

#### (5) フランスにおけるしつけ（懲戒）と虐待の境界の認識に関する検討

2020 年に体罰禁止が法定化された日本の状況について、法規制や社会的規範の観点から懲戒行動を考察するため、2018 年に体罰禁止法を施行したフランスを研究対象とし、フランスにおけるしつけと児童虐待の境界に関連する要素を明らかにした（加藤・藤岡 2020）。フランスにおいて児童虐待事例に携わった経験をもつ専門職のうち、調査に協力の承諾が得られた 6 名を対象に、半構成的グループ・インタビューまたは個別インタビューを行った。逐語化した記録から、しつけ（懲戒行動）と児童虐待について言及されている記述 179 を分析した結果、29 の下位カテゴリーが抽出され、最終的に 8 カテゴリーが形成された。抽出されたカテゴリーは記述が多かった順に以下の通りである。1. 具体的なしつけ方法の獲得、2. 専門家の支援、3. しつけ / 虐待判断の難しさ、4. しつけ / 虐待判断の外的基準、5. 他者との関わり、6. 文化的要因、7. 親のしつけに関する独自の基準、8. 親のコンディションの調整、であった。

#### (6) スウェーデンにおける体罰禁止法施行以降の、子ども虐待予防、子どもの意見表明システムの構築について

スウェーデンの子どもの福祉団体（The Children's Welfare foundation）の 2017 年の報告書によると、心理的虐待は、全体の 16% で、他多い順番に、身体的虐待（24%）、近親のパートナーの暴力を目撃（面前 DV）（14%）性的虐待（9%）ネグレクト（6%）となっている。このように、1979 年に体罰が禁止された国であっても、身体的虐待は生じており、面前 DV の割合の多さも課題となっている。虐待によって一時保護された子どもは、意見表明の一環として、主として、ソーシャルワーカーと警察官からの面談を受ける。検察官や臨床心理士やコーディネーターも交えて意見交換をする多職種連携は、虐待の疑われる子どもの状態を多角的な視点で精査する上で貴重である。スウェーデンでは、警察との連携が非常に重視されており、虐待と鑑別の難しい懲戒行動を、詳細に診断するシステムが構築されており、虐待の疑われるものを選別している。コンサルテーションミーティング、情報交換に関係機関が協働していることが示されている。子どもの家におけるコンサルテーションミーティング、情報交換（多職種連携）では、特にソーシャルワーカーと警察の連携が非常に重視されている。子どもの家は、虐待の疑われる児童についての情報を収集し、支援の必要性や犯罪調査の為に計画を実施している。CPS（ソーシャルワーカー）と警察官が子どもとのコンサルテーションミーティング（子供の意見表明）での重要な役割を担っているのである。



### Ⅲ 児童相談所や児童養護施設等施設職員に対する『子育て支援臨床アプローチ』（スタンダード版）の活用（職員の「被養育の歴史」へのまなざしの重要性）

以上の報告の中で、特に『子育て支援臨床アプローチ』（スタンダード版）（資料1）（藤岡2022）についてスーパーヴィジョン場面での活用を検討していく。児童相談所職員あるいは児童養護施設等福祉施設の職員の育成に対する配慮が必要であり、そのためには、職員や里親への被養育の歴史、被懲戒の歴史を踏まえた語りの保障への支援が大事であると考えている。ここでは、まず、児童相談所職員への支援について検討していく。

#### 1 児童相談所におけるスーパーヴィジョン

##### （1）職員育成におけるスーパーヴィジョンについてーケース進行と被養育の歴史への着目の重要性ー

児童相談所では、職員育成において、ケース進行の中に支援者支援の観点を含めることが大事ではないかと筆者は考えている。そういう目配せができるような職員（支援者支援スーパーヴァイザー）を要所要所に置いておくことで、職員へのサポートがケースの進行と合わせて意識されていくと、職員支援だけでなく、職員の育成につながっていくと考えられる。

今は育成をされていく時期でもあるので、むしろ、ありがたいということを小さい時から獲得できている多くの職員がいる。しかし、一方でそういう体験がなかなかできなくて、ちょっと頑張ってみても、すごく挫折して、そこから、回避し、つらいことがあったことから回避することで生きてきた人たちにとって、同じことが繰り返されてしまう。被養育の歴史に注目しなければならない局面である。自分を保ちながらチャレンジしていくという感覚を持てる人と、そうでない人がいる。しかし、児童相談所の仕事に就いたからにはやっぱり同じチームとしてやっていくことが必要なので、その回避や、困難に直面して固まってしまうということではなくて、一緒にチャレンジしていけるような自分自身への課題設定が必要となる。

スーパーヴィジョンの中で、ケース進行と合わせて支援者支援の眼差しが必要な理由がここにある。挫折体験や失敗体験の際に十分に寄り添ってもらったり、そばにいて励ましたり慰めたりしたりする経験が十分ではなかったのではないかと感じる職員がいると筆者は実感している。これらの点は、第四段階 被懲戒の歴史の想起と対処方法にあるように、折に触れて、親から生き方や慰めや励ましを得てきた子ども時代を十分に遅れなかった人たちにとって、職場でのスーパーヴィジョン体験はそのやり直しともいえる。

また、第五段階 子育て支援の具体的な方法、および子ども中心モデルの再確認のなかの「⑪ 子どもたちが日頃から何を感じ、何を考え、何を希望し、将来どのように育つことを望んでいるのかを、随時聞くようにしていますか。また、そのための「子どもが安心して語る場」をどのように設定していますか（意見表明の保障）。」これは、スーパーヴァイザーにとっても大事であるが、問いを向けられることで支援を受け、支えられていることを実感できるということも、スーパーヴァイザー（新人、新任職員等）にも必要なことかもしれない。これは、ケース進行の中で、挫折を乗り越える、失敗から学ぶ、その先に成長があると実感できる局面を再体験している、ある

いは、新規体験しているのかもしれない。

## (2) 養育家庭（里親）支援におけるスーパーヴィジョンについて

児童相談所職員や児童相談所に限らず、里親担当の職員は、里親自身のなかでの生育歴（やっ  
てもらってこなかった怒り等）に着目することの必要性を痛感している。その被養育の歴史（被  
懲戒の歴史）が、実際の里子の養育の中で困難な養育不調に表現されたりすることがある。適  
切な声掛けや関わりができなくなることもある。具体的な日々の里親支援の中で、このような里  
親へのアタッチメントの観点からの支援は重要となる。

ただ、一方で、このような里親自身の根本的なところへとアクセスしながら、支援することの  
困難さに直面することは多い。里親自身が抱えているものをどう取り上げていくのか、である。  
里親自身が持っている課題、静かな怒り、成育歴の問題・課題にどう関わるかであるが、どうし  
てもその課題のほうを何とかしなければと思ってしまう。

里親自身の「自分の限界点」の把握である。そこは踏みとどまっているという語りがあると、  
支援するほうも「道筋を持ちながら支援できる」。しかし、事態が深刻化し、かつ里親—里子関  
係が悪化するケースは、支援体制の道筋に乗ってくれていない点を支援者も里親も気づけていな  
いことで深刻な事態を招くことがある。支援の道筋に再度入ってもらうために、『子育て支援臨  
床アプローチ』（スタンダード版）のなかの「第一段階 子どもの人権及び安心・安全な養育への  
権利についての意識の醸成」、や「第二段階 しつけと虐待の鑑別、峻別の具体的な提示」は有  
用となる。問いを投げかけることで、里親との話が支援の道筋に乗ることへと軌道修正される。  
関係構築は、プロセスの中で起きるのであり、事前でも事後は副次的であると筆者は考えている。

里親に対して、「アクセスも難しい、その人自身の子育て状況も難しい」という二重の苦しみがある  
場合に、支援者（児童相談所職員や里親支援担当者）としてのメンテナンス、あるいは「め  
げない心」のようなこと、あるいは「持ち直す力」は、相当トレーニングしないとイケないかも  
しれない。そして、このようなことができるためには、ケースについて複数で関わり、複数が語  
るということも重要である。支援者が複数で関わっていく。同じケースを共有しながら、分担し  
たり、あるいは話し合ったりしていくということが大事であろう。支援者が抱え込み過ぎないで、  
地域での支援の輪を広げるのも視野に入れながらケースに関わることも大事になる。「第三段階  
子育て場面における社会的文脈や文化を考慮すべきこと」、「第五段階 子育て支援の具体的な  
方法、および子ども中心モデルの再確認」である。例えばどこかのネットワークに紹介するのは、  
里親のためだけではなくて、支援者のためでもある。支援者自身が抱え込み過ぎなくてよいとい  
うことのメッセージが支援者にも必要であろう。被養育への振り返りは、里親もその支援者も同  
時進行で起きてくると言ってもよいかもしれない。相互意見表明というべき配慮点である。

里子にとっての発達的な課題が日々変遷していく中で、里母、里父とうまくいくということが、  
良好なことなのかどうか。意見に違いがあったり、自分の思いが食い違ったりしても、お互いが  
言葉にして表現し、かつ互いを尊重できるかどうか。それは意見の対立にもなるが（権利侵害  
になっていることに思いが至らず、そのまま）声を荒げてしまうときもあるかもしれない。権利  
擁護を子育ての根底におくという本アプローチの第一段階が随時意識されていることが大事であ  
る。

関係づくりが非常に難しい、里親も含めて実親も、基本的には、社会人として生きてきた歴史が十分にあるので、通常の社会人としてのコミュニケーションはできるわけである。つまり、通常の適応はできているにもかかわらず、子育て場面で深刻な状況に陥るリスクを負っている。実際に、里親に問いかけるというよりも、話を聴いている中でのエピソードから、支援者が「第四段階 被懲戒の歴史の想起と対処方法」を想定しながら話題を進めていくことが重要であろう。抱えている、その里親のうまく整理がついていない感情的な部分は、普段はあまり出さなくてもよいけれど、こと子育てとか、つまり自分の根幹に触れるようなところに支援者が来られてしまうと、そういう表面的な、やり過ごしてきたところでは対応できない、怒りだとか拒絶感だとか、ぽつと出てくることがある。しかし、実際に子育ての中で起きている、様々な感情的なもつれ等は、『深いところでのその人の姿みたいなもの』が出てきてしまう。表面的な関わりではないところで、『拒否されたり、怒りが出てきたり』というところは子育ての中で起きている可能性がある。

さっきまで電話の対応が良かったのに、急に怒鳴りだしてきたり、拒否されたりすることが起こりうることである。だからこそ、操作的で巻き込み型の傾向を潜在的に有している里親は、それで支援者がおろおろしたりしてしまうと、『支配下に置いてきてコントロールを始める』ということが起きてしまう。その人との関係の中では、行くと傷つく、関わると傷つくというので、支援者が疲弊し、参ってしまうのである。支援が困難になりがちな里親としては、困ってしまうという構造を作ることによって、『常に支配のコントロール下に置こうとする』ことにもなりかねないだろう。しかし、支援者としては、そのことに気付いておく必要がある。この方は、このようにして、これまでも人間関係上の困難さを乗り越えてきた可能性がある。第四段階の内容に基づいて、里親のこれまでの生い立ちを整理しながら、支援の拒否がどこから来ていることなのかを掘り下げていくきっかけになる。里親の被養育の歴史へのまなざしが必要であり、気が付かないうちに出てしまう操作性に支援者が巻きこまれることで、里親をさらなる操作性の行使者にする可能性があり、留意すべき点である。

そして、その先に、「第六段階 養育者が「アタッチメント（愛着）の器」であるための5つの要点」がある。筆者らが感じてきた、第六段階にいたるまでに、行っておかなければいけないことがいかに多いかということ、具体的なスーパーヴィジョン場面を想定しながら整理してきた。第六段階で書かれていることは、誰もその重要性を否定する人はないだろう。しかし、第五段階までのことをじっくりと整理しておかないと、養育家庭において、里子を感じる安心安全な空間や、にじみ出るような『養育の雰囲気』は作れないのではないかと筆者は考えている。

## 2 児童養護施設等におけるスーパーヴィジョンについて

児童養護施設における子育て支援で、課題となるのは、職員一人ひとりの生い立ちの歴史が異なる中で、いかに職員集団の多様性を保持しながら、施設全体の養育観、支援観を統一していくか、ということである。これは、バランスが入所している子どもたちの状況によって異なってくる。「職員の多様性を尊重した緩やかな統一感」という臨床的な言葉がしっくりとくる。その際、職員同士の情報共有をどのようにシェアするか。そもそもを情報共有、子どもたちの日々の生活の中での様子、その一人一人の子どもたちが抱えている課題、関係構築が、随時、育成記録、



支援記録はあるとしても、じかに関わってみなければその子がどのような状態にあるかはわからない。深い怒りの感情を抱えている感じがあるのか、また、子どもが考えたり感じたりすることの表現もどのぐらい自分に対して言ってくれるか。人によって表現の仕方を変える子どもなのかとか、そういう情報が時々刻々と変わり、その情報を共有しなければいけない。

コミュニケーション力という言葉があるが、育成の渦中にある職員に対して伝えたことがそのとおりに伝わっている、それから伝わる時に伝えた内容の背景にある養育観とか、子どもたちに対する思いみたいなものも、この人には伝わっているという感覚がある時と、人によっては養育観とか、基本的にベースで大事にしてるものがズレているような気もするが、取りあえずやってもらうことをやってもらわなくてはいけないからそれを伝える、ということも起こりうる。しかし、そういうときは、意をくんでもらうところの範囲が違うので、こちらの意図したことは違った支援が展開するということがある。この点は現場で皆が苦労している点である。

同じことを言っているのに職員 A には届くのに、職員 B に対しては届かないというこの感覚がある。自分の養育観とか、この子に対する見立ても含めて伝えるのは、時間との勝負ということもある。その時間がなかなか取れない。この人にはかなり丁寧に伝えることでやっと共通した養育の状況がつかれるけれども、この人に対しては阿吽でも伝えることができる。情報共有といっても、相手によって、相手の「汲む力」が前提となって、情報共有が成り立つのである。

また、依存性が高く、指示待ちの職員がいた場合、自分で考える力を十分には育てていないし、ある意味、自立的な状況に常に自分を置こうとしてないということもあるので、こちらとして、言わざるを得ず、それがさらに自律的な判断を阻むという悪循環になりかねない。職員の「自分で決めることができない感覚」を持っている場合、無理に決めてもらおうとびっくりするような対応になることもあり、難しい。

そういうことを考えると、施設職員育成においても、実は子どもたちが置かれてる状況と、職員が置かれている状況は似ていると考えることができる。「自分でやってみて、できなかったらできなかったで、対策を考える」という中での「成就感」、「成功体験」が蓄積されていく。子どもたちに対しては、養育でなされている要点である。つまり自分で決めることができないのは、決める場に自分を置いてもらえなかった虐待とかネグレクトとかの環境にあったからで、子どもたちにとっては、自分で決めていいよといわれるよりも、決めてもらって、うまくいかなかったらその人のせいにすればよいという、自己決定に対する経験不足、自信のなさ、だんだん生活の中の支援の中で露呈することがある。これは、新人、新任職員でも同様のことが起こりうる。小さなときに日常的な場面、生活の中の時々刻々の中に、「どのくらい自分の意見が言えて、自分の決定感に対する支援があって、うまくいく、いかないということについて、その見通しの中で寄り添ってもらえたか」という体験が必要となり、これは、養育の内容であり、かつ支援者支援の内容でもある。

これらの職員育成の困難さを踏まえ、職員が自分のこと、そして日頃の養育を振り返るためのきっかけとして、『子育て支援臨床アプローチ』（スタンダード版）を以下に整理した。

「第一段階 子どもの人権及び安心・安全な養育への権利についての意識の醸成」、「第二段階 しつけと虐待の鑑別、峻別の具体的な提示」「第三段階 子育て場面における社会的文脈や文化

を考慮すべきこと」、「第四段階 被懲戒の歴史の想起と対処方法」、「第五段階 子育て支援の具体的な方法、および子ども中心モデルの再確認」「第六段階 養育者が「アタッチメント（愛着）の器」であるための５つの要点」である。生い立ちの歴史が、子どもとの関わりの中で出たり、出なかったり、あるいは特にこの子に対してちょっと厳しめにあたってしまうとか、あるいはルールにちょっとこたわり過ぎてしまう面だとか、あるいは特定の子どもに対しての思い入れが強くなり過ぎてしまうところとか、それは生活の中で起こり得ることがあり、自分でバランスよく子どもたちに対して関わっていくために、どういうところを配慮したらいいのかという点を整理したのが、このアプローチである（特に、第二段階、第四段階）。

まず子どもの人権というのが、個人として尊重されて幸せに生きるということである。人権というのは、権利侵害があるとかの以前に、そもそもが個人として尊重されてる感覚、子どもたちが幸せに生きていく、どこで暮らしていても幸せに暮らす権利を有しているということがしっかりと押さえられていなければならない。そのためにどういうことを配慮してるのかということである（第一段階）。養育観に、根幹に触れるところにもなる。声掛けで心掛けている、表情、しぐさで心掛けていること、侵害してしまったときがあるとする、どんなことがあったか、それに対してどのように対処したのか、それから安心して暮らせるということのために、声掛け、表情、しぐさとか、それからそれを侵害してしまったようなことがあれば、それはどんなことがあったのか、どんなふうに対処したか。

子どもたちの自己決定感の尊重で、子どもの意見や希望を聞くようにしているか。自立的に生きてくために決定するのは、こういうことを決定していこうとか、あるいは自分のことを大事にしているからこそ出てくる言葉というのにしっかり職員として耳を傾けることが必要である。一方で、単に楽をしようとか、わがままでもとか、努力をしたくないからとか、そういうことの中で出てくる自分の意見だったり、希望だったりするということもある。しかし、これは、自己決定感や意見表明支援のプロセスである。そのような練習をしてこなかったと理解するには、職員自身が、その過程を理解し、被養育の歴史に対する内省を折に触れて掘り下げることが求められるだろう。

子どもの養育の中で大事にしていることは何かということ（第二段階 しつけと虐待の鑑別、峻別の具体的な提示）に職員の養育観が出てくることが多い。筆者は、研修のなかでこの問いを、職員全員に投げかけることが多い。日本の文化は養育ということの中に、しつけという言葉を通してやらざるを得ないような内容を含めている。それをないがしろにしては、日本での養育は難しい。例えば食事のときのお箸のこと、食器の取り扱い方、それからご飯が終わった後のあいさつ、終わってから自分で食器を下げるとか、日本文化の中で当たり前になっていることをどのように伝えるか。職員自身の被養育の歴史とのありあいが求められる点である。

ただ、このしつけという言葉が子育てにおいて課題を浮き上がらせる。あることができる子とできない子がいる場合に、どのぐらいの厳しさでそれを伝えていくのか。発達障害のベースがあったり、あるいはそういうしつけ的な行為を支配行動として感じてしまう子どもたちもいたりする。その人の言い方、伝え方、繰り返し伝えること、新人、新任の人たちにとっては言い方の難しさ、寛容な感覚で関わるときの「寛容さの水準」がある。実は、この子育てにおける「寛容さの水準」

に、第六段階（養育者・支援者の 予測性・感受性・有用性・志向性・存在性）は、大きく関与している。この第六段階は、子育て方法ではなく、支援者、養育者のありようを示しているからである。そして、ここにいたるまでの第一から第五段階まで、折に触れてメンテナンスすることで、第六段階が生かされると考えている。これらの点は、さらに検討されなければならないだろう。

### 3 「アタッチメント（愛着）の器」としての施設・機関職員、里親、実親、そして、施設・機関

第六段階にある、予測性は、安定的に予測してもらえているということをからかじめ、支援者が予測して支援・養育行動をとることとなる。感受性は、こちらが感受性を向けていることを、相手によって感受してもらえるようにわかりやすく表現することが求められる。有用性は、役立とうとしている支援者・養育者の態度と具体的な内容が、相手に伝わっていることが大事である。さらに、志向性は、こちらが相手の気持ちをおもんばかっていることが折に触れて伝わっているように、声掛けや行動を示すことでわかりやすく提示することになる。さらに存在性も、相手に存在性を内在化してもらうために、心理的、物理的なわかりやすい存在の提示が必要となる。「アタッチメント（愛着）の器」（藤岡 2008）としての職員、しいては、「アタッチメント（愛着）の器としての施設・機関」が、子どもたち、職員、里親、実親に届くように、明確な自己表現が支援者、養育者には求められている（藤岡 2020）。これまで見てきたように、児童相談所職員への支援、里親への支援、施設職員への支援には、共通して、被養育の歴史への配慮が必要であり、第6段階にある子育てにおける配慮点をいきなり伝えても、それぞれは、自分の中に駆る感情的な側面と向き合わざるを得ない。対応に難しい子どもや実親、里親、職員と向き合うことで直面する困難さは、このような養育の歴史が、長い年月を経て今日の日本の文化や子育て方法等の底流を流れているからである。第一段階から第六段階までの自分自身の精査を通して、支援者、養育者としてのメンテナンスが求められるゆえんである。

## IV おわりに—本研究の展開としての「意見表明の環境整備」の必要性について—

本研究を踏まえ、被養育の歴史を踏まえた支援や養育の見直しの道筋が見えてきた中で、被養育の歴史を見直すきっかけは、人権擁護を基礎においた養育者—子どもの相互意見表明を子育て支援の中核におくことが求められると示唆された。令和4年6月、児童虐待防止法が改正され、子どもの意見表明についての環境整備の必要性が明記された。意見表明は、独立して成立することではなく、養育環境と一体化してみていかなければならない。意見表明に関しては、子どもとの信頼関係を基礎として、子どもの意見を様々な方法で傾聴するとともに、子どもの考えの整理を後押しし（意見形成支援）、子どもが望む場合は意見表明を支援したり代弁したりすること（意見表明支援）が求められている。

ここで重要なのは、子どもとの関係性であるが、被虐待児支援においては、職員や里親との

関係性構築が不安定な場合は、特定の職員（里親）への攻撃性や不安、疑念などが生じ、意見表明が十分に行えない可能性がある。これは、子どもと職員・里親との不安定な関係から安定した関係に移行する際の特徴であり、子どもの課題に対する新たな観点として「関係特異性」ととらえられている。子どもの意見表明の環境整備には、このような関わる支援者との関係性のアセスメントと丁寧な関係構築のプロセスへの配慮（『子どもと支援者の関係性への配慮』）、及び子どもの意見を丁寧に聞くことで子どもの意見を醸成し、表出に至るきっかけとなる支援プログラムの構築が必要である。本研究での被養育の歴史、被懲戒の歴史への視座は、ここでも重要となる。

関係性の観点や被養育の歴史、被懲戒の歴史の観点に基づいて、子どもの意見表明についての環境整備、支援プロセス、具体的な支援プログラムなどを含んだ「子どもの意見表明支援プログラム」を構築が今後さらに求められているといえる。親自身が子どもとの関係を構築・維持する際に、自身の親や自身の支援者との不安定な関係性構築の歴史が反映しており、子どもの意見をなかなか聞けないという状況がある。親自身が話を聴いてもらえた経験が乏しい可能性もある。この点は、施設職員、児童相談所職員、里親も同様である。「この人には、自分の意見が言えた」、「この人には、時間がかかったけれど徐々に意見が言える関係になっていった」など親を含めた支援者も関係性（及びその歴史）の観点から養育方法や関係性をとらえなおすことが必要であろう。それらを明らかにすることで、子ども自身の意見表明のための支援者研修、環境整備等についても適切な対策がとられていくと考えられる。日本における子どもの意見表明の実態を、「人によって意見表明のありようが異なる」という関係特異性等の観点からとらえ直し、その結果を踏まえて、子どもの意見表明についてのプログラムを構築するのが意見表明の環境整備の一助になろう。

**謝辞** 本研究は、JSPS 科研費 JP17H02610 の助成を受けたものであり、文部科学省科学研究費助成事業、基盤研究（B）『親の懲戒行動の解析に基づくアタッチメント臨床アプローチの再構築に関する研究』（研究代表者：藤岡孝志）の助成金を受けて実施された調査の成果の一部である。なお、本研究は、2017 年度から 2019 年度までの予定であったが、2019 年度（2020 年 3 月）に予定されていたスウェーデンでの面接調査がコロナ禍の影響で延期になったことから、面接調査（Zoom でのスウェーデン調査）が実施できた 2021 年度（2022 年 3 月）まで延長された。

## 引用文献

藤岡孝志（2008）愛着臨床と子ども虐待．ミネルヴァ書房

藤岡孝志（2020a）「体罰禁止の内在化」と懲戒行動の解析に基づく子ども虐待防止に関する研究．日本社会事業大学研究紀要 66, 181-198.

藤岡孝志（2020b）支援者支援養育論—子育て支援臨床の再構築．ミネルヴァ書房

藤岡孝志（2021）被懲戒の歴史を踏まえた子育て支援臨床の構築に関する研究．日本社会事業大学研究紀要 67, 161-177.

藤岡孝志（2022）『子どもの権利擁護モデル』に基づく子育て支援臨床アプローチの構築に関する研究—養育者の「被懲戒の歴史」に着目して—．日本社会事業大学研究紀要 68, 211-229.

加藤尚子・藤岡孝志（2020）しつけ（懲戒）と虐待の境界の認識に関する検討：フランスの懲戒行動に関する現状をふまえて．日本社会事業大学研究紀要 66, 137-152.

セーブ・ザ・チルドレン（2022）体罰のない社会をつくるために．

<https://www.savechildren.or.jp/lp/banningphp5/>（2022年10月1日検索）

宇野耕司（2020）懲戒ではなく虐待である：児童相談所職員からみた保護者の懲戒の意味に関する研究．日本社会事業大学研究紀要 66, 59-78.

宇野耕司（2022）懲戒ではなく虐待である：児童相談所職員による保護者の不適切な懲戒に対する支援の意味に関する研究．日本社会事業大学研究紀要 68, 89-107.

和田上貴昭（2020）体罰の認識：ドイツにおける児童福祉専門職への聞き取りから．日本社会事業大学研究紀要 66, 47-57.

和田上貴昭（2022）子育てに養育環境が与える影響 ドイツ在住日本人女性へのプレ調査．日本社会事業大学研究紀要 68, 143-153.

## 資料1

### 『子育て支援臨床アプローチ』（スタンダード版）の段階的なプログラム（全六段階） （藤岡 2022）

#### 第一段階 子どもの人権及び安心・安全な養育への権利についての意識の醸成

##### 問いかけ

- ① **子どもの人権**（個人として尊重され、幸せに生きること 等）を配慮して、日ごろから心がけていることはありますか。
- ② 子どもへの関わりのなかで、**声掛け**として心がけていることはどんなことですか
- ③ 子どもへの関わりの中で、**表情やしぐさ**で心がけていることはありますか。
- ④ **子どもの人権を侵害**してしまったと思ったことはありますか。あれば、具体的に記述してください（あるいは、述べてみてください）。
- ⑤ **子どもの人権を侵害**してしまったかと思った際に、どのようにそのことに対処しましたか？
- ⑥ 「**子どもたちが安全で安心して生活できる場**」を配慮して、日ごろから心がけていることはありますか。
- ⑦ 「**子どもたちが安全で安心して生活できる場**」を配慮して、**声掛け**として心がけていることはどんなことですか
- ⑧ 「**子どもたちが安全で安心して生活できる場**」を配慮して、**表情やしぐさ**で心がけていることはありますか。
- ⑨ 「**子どもたちが安全で安心して生活できる場**」を侵害してしまったと思ったことはありますか。あれば、具体的に記述してください（あるいは、述べてみてください）。



- ⑩ 「子どもたちが安全で安心して生活できる場」を侵害してしまったとか思った際に、どのようにそのことに対処しましたか。
- ⑪ 子どもに関わること（遊び、学習、食事等）を決めるときに、**子どもの意見や希望**を聞くようにしていますか。意見を聞くことができている内容とできていない内容を分け、どうして聞けていないのか、考えてみましょう。

## 第二段階 しつけと虐待の鑑別、峻別の具体的な提示

- ① 子どもへの養育のなかで、大事にしていることはどんなことがありますか。
- ② 子どもへのしつけという言葉で、どのようなことを思い浮かべますか。
- ③ 子育てにおいて、やっていいこと、やって悪いことについて、どのように考えていますか。
- ④ 子どもに伝えたい内容について、どのように子どもたちに伝えていきますか。
- ⑤ 子どもに伝えたい内容について、子どもたちに届いていないと感じることはありますか。あるとしたら、それはどんな内容であったり、どんな状況で起きていますか。
- ⑥ 子どもに伝えたい内容について、子どもたちに届いていないと感じることがあった場合、その後どのように伝わるように工夫されていますか。
- ⑦ 子どもに伝えたい内容について、子どもたちに届いたと感じときは、どんな時ですか。また、その時の子どもたちの様子は、どんな感じですか。
- ⑧ 子どもへの養育やしつけについて、誰かに相談していますか。相談しているとするとどなたに相談していますか。
- ⑨ しつけという名のもとに、やってよいこと、悪いことについて、どのような考え方をしていますか。
- ⑩ しつけと虐待との違いについて、どのようなことを思いますか。

## 第三段階 子育て場面における社会的文脈や文化を考慮すべきこと

- ① 子育ての中で、このような子どもに育ってほしいと考えている願いについて自由に語ってください（お書きください）。
- ② このように育ってほしいと考えていることの中で、**父親・母親からの影響**があれば、それはどんなことですか。父親、母親と分けて自由に語ってください（お書きください）。
- ③ このように育ってほしいと考えていることの中で、**祖父・祖母からの影響**があれば、それはどんなことですか。父親がた祖父母、母親がた祖父母と分けて自由に語ってください（お書きください）。
- ④ 日本で子育てをしているからこそ感じることを自由に語ってください（お書きください）。
- ⑤ 日本で子育てをしているからこそ感じることのなかで、苦しいと感じること、面倒と感じること、いやだと感じることなどを自由に語ってください（お書きください）。
- ⑥ 今住んでいる地域での子育てだからこそ感じることのなかで、苦しいと感じること、面倒と感じること、いやだと感じることなどを自由に語ってください（お書きください）。
- ⑦ 我が家（今の施設、養育家庭含む）での子育てだからこそ感じることのなかで、苦しいと感じること、面倒と感じること、いやだと感じることなどを自由に語ってください（お書きくだ

さい)。

- ⑧ 日本で子育てをしているからこそ感じるもののなかで、うれしいこと、楽しいことなどを自由に語ってください(お書きください)。
- ⑨ 今住んでいる地域での子育てだからこそ感じるもののなかで、うれしいこと、楽しいことなどを自由に語ってください(お書きください)。
- ⑩ 我が家(今の施設、養育家庭含む)での子育てだからこそ感じるもののなかで、うれしいこと、楽しいことなどを自由に語ってください(お書きください)。

#### 第四段階 被懲戒の歴史の想起と対処方法(第四段階)

- ① これまで、親(養育者)から叱られた記憶があれば、その中で、語ることが可能なエピソードをお話してください(記述してください)。
- ② 親(養育者)から叱られた記憶のなかで、叱る理由が思い出せる内容があれば、お話しください(記述してください)。
- ③ 親(養育者)が自分を叱る理由が、自分に対する権利侵害だと感じますか。もし感じたら、同じことを自分の子どもにしようと考えますか。また、自分だったら、叱らないで、どのように、同じ内容を子どもに伝えますか？
- ④ これまで、親(養育者)から放置された、あるいは見放されたと感じる記憶があれば、語ることが可能なエピソードをお話してください(書くことが可能なエピソードを記述してください)。
- ⑤ 親(養育者)から放置された、あるいは見放されたと感じる記憶のなかで、親が放置する、あるいは見放す理由が思い出せる内容があれば、お話しください(記述してください)。
- ⑥ 親(養育者)が自分を放置するあるいは見放す理由が、自分に対する権利侵害だと感じますか。もし感じたら、同じことを自分の子どもにしようと考えますか。また、自分だったら、放置をしたり、見放したりしないで、どのように、同じ内容を子どもに伝えますか？
- ⑦ これまで、親(養育者)から怒鳴られた記憶があれば、その中で、語ることが可能なエピソードをお話してください(書くことが可能なエピソードを記述してください)。
- ⑧ 親(養育者)から怒鳴られた記憶のなかで、親が怒鳴る理由が思い出せる内容があれば、お話しください(記述してください)。
- ⑨ 親(養育者)が自分を怒鳴る理由が、自分に対する権利侵害だと感じますか。もし感じたら、同じことを自分の子どもにしようと考えますか。また、自分だったら、怒鳴らないで、どのように、同じ内容を子どもに伝えますか？
- ⑩ これまで、親(養育者)から叩かれた記憶があれば、その中で、語ることが可能なエピソードをお話してください(書くことが可能なエピソードを記述してください)。
- ⑪ 親(養育者)から叩かれた記憶のなかで、親が叩く理由が思い出せる内容があれば、お話しください(記述してください)。
- ⑫ 親(養育者)が自分を叩く理由が、自分に対する権利侵害だと感じますか。もし感じたら、同じことを自分の子どもにしようと考えますか。また、自分だったら、叩かないで、どのように、同じ内容を子どもに伝えますか？

#### 第五段階 子育て支援の具体的な方法、および子ども中心モデルの再確認

- ① 子どもの人権（個人として尊重され、幸せに生きること 等）を配慮して、日ごろから心がけていることはありますか。
- ② 「子どもたちが安全で安心して生活できる場」を配慮して、日ごろから心がけていることはありますか。
- ③ ルールの提示（宿題、ゲームの時間、基本的生活習慣、言葉遣い等）で、日ごろから心がけていることはありますか。具体的な内容を含めて、語ってください（お書きください）。
- ④ 子どものことで何か問題が発生した場合、子どもを取り巻く大人たちで何ができるか、日ごろから心がけていることはありますか。具体的な内容を含めて、語ってください（お書きください）。
- ⑤ 子どもが何か問題を起こした場合、子どもを取り巻く大人たちで何ができるか、日ごろから心がけていることはありますか。具体的な内容を含めて、語ってください（お書きください）。
- ⑥ 子どもを取り巻く周りの大人たちの関係性で、関係性が弱いと感じるところがありますか。もしあれば、どんなところですか。また、具体的にどのようにしていったらよいと考えていますか。
- ⑦ 子どもを取り巻く周りの大人たちの関係性で、関係性が強いと感じるところがありますか。もしあれば、どんなところですか。それを強いと感じるのはどうしてですか。また、どのようにそれが実現できていると思いますか。
- ⑧ 子どもを取り巻く周りの大人たちの関係性で、今後改善していかなければならないと感じているところはどんなところですか。また、具体的にどのようにしていったらよいと考えていますか。
- ⑨ 様々な子育て方法の中で、自分が大事にしている方法はどんなことがありますか。また、それは、どのように学びましたか。
- ⑩ 様々な子育ての心構えの中で、自分が大事にしている心構えはどんなことですか。また、それはどのように学びましたか。
- ⑪ 子どもたちが日頃から何を感じ、何を考え、何を希望し、将来どのように育つことを望んでいるのかを随時聞くようにしていますか。また、そのための「子どもが安心して語る場」をどのように設定していますか（意見表明の保障）。

#### 第六段階 養育者が「アタッチメント（愛着）の器」であるための5つの要点

- ① 子ども（たち）から見て、自分が安全で安心して暮らせるように養育者がしてくれていて、また個人として尊重され、幸せに生きることができるように関わってくれていると予測できるように、心がけていますか（予測性）。具体的なエピソードを一つでもよいので語ってください（書いてください）。
- ② 子ども（たち）から見て、養育者が折に触れて自分のつらさやきつさ、うれしい気持ちなどに気付いてくれていると思ってもらえるように、心がけていますか（感性）。具体的なエピソード

ソードを一つでもよいので語ってください（書いてください）。

- ③ 子ども（たち）から見て、養育者が自分のために役立とうとしてくれていると思ってもらえるように、心がけていますか（有用性）。具体的なエピソードを一つでもよいので語ってください（書いてください）。
- ④ 子ども（たち）から見て、養育者が自分の気持ちをおもんばかろうとしてくれている、わかろうとしてくれていると思ってもらえるように、心がけていますか（志向性）。具体的なエピソードを一つでもよいので語ってください（書いてください）。
- ⑤ 子ども（たち）から見て、養育者が必要な時にはいつも自分のそばにいてくれている、離れていても自分のことを心配してくれていると思ってもらえるように、心がけていますか（存在性）。具体的なエピソードを一つでもよいので語ってください（書いてください）。